

9月の園だより



長い夏休みが終わりました。今年の夏は、記録的な猛暑ということで、保護者の皆様方も、毎日子どもたちとどう快適に、そして有意義に過ごそうかと頭を抱えられていたことと思います。夏は、海や山や生き物などの自然と触れ合ったり、お祭りや体験型イベントも盛りだくさんで、子どもたちの好奇心をかき立てられる絶好の機会も多かったことでしょう。

さて、いろいろな好奇心から「知性」をはぐくむ。ということで、心理学者であり臨床心理士の植木理恵さんのお話がありました。人は大人になるにつれ、失っていくものがあるそうです。それは「原始的な好奇心」と言って、「理由なく湧き出てしょうがない興味」のことで、ちょうど幼稚園くらいの年齢の子どもたちが持っている能力です。

たとえば、お母さんのスマホやエプロンをかじったり舐めたりしては、いつまでも手放そうとしません。何回も何回も同じ絵を描いては、「ねえ、見て見て!」とすがります。全身泥んこになりながら必死の形相で、土を掘っては埋めています。

こういう力は、まさに「理由なく」湧き出てくる興味であり、「原始的な好奇心」です。

子どもたちは、「これは無駄な情報」「それはいらぬ行動」といった、大人のような分けへだてをせず、目に入るすべてのことを心に吸いこもうとします。

大人から見ると、「もう、なんでそんな事をするの?」と分からないことだらけ。危ないことも多いですし、ストレスがたまることもあります。無意識のうちに大人は、こういった子どもの原始的な好奇心を「つぶしてしまう」ことに必死の毎日を送っています。その結果、子どもたちが7歳になる頃には、「別に興味ない」「それって意味があるの?」が口ぐせの、無気力な若者へと変身し始めます。それは、大人にとっても少しも嬉しいことはありませんね。幼稚園までの間に「いいからやめなさい」と毎日頭ごなしに言われることで、子どもは「そうか、自分は『無関心』でいればいいんだ」という考えグセを覚えてしまうそうです。反対に、「原始的な好奇心」が満たされた子どもは、次のステップ、つまり「知的な好奇心」という、高い発達段階に進めることが、発達心理学で実証されています。

理由なく湧き出る好奇心を大人から消されるのではなく、支えられてはじめて「それはなぜかな?」「どう調べたらわかるのかな?」という、理由を探求する高度な好奇心が芽生えます。それが「種」となって、伸びやかに「知性」が育まれ、内面の豊かな少年少女へと成長していけるのです。「原始的な好奇心を満たす」。難しく聞こえるかもしれませんが、親や先生の役割として重要なことは、ただ一つ。それは、子どもの抱く興味に対して、ひと言でもいいから「肯定的な共感」を口に出してみせるということだそうです。

つまり、叱ったり指導したりする前に、一度は「あらら、泥んこになるほど楽しかったんだね!」と、子どもの感情を代弁してあげるということです。極例で（あってはならないことですが）たとえライターなど危なくいじっていたとしても、「面白いの?」と一度は感情に従うことが大切で、その上で、ダメなことはダメ、危険なのだとしっかり指導してあげてください。子どもの心は、叱られた悲しさだけでなく、共感してもらった「温かさ」が残り、大人の言葉がしっかり心に入るそうです。ご家庭でも園でも、まずは子どもの思いに共感しながら、好奇心の「種」を育てていきたいものですね。2学期も宜しくお願い致します。